第二次川神聖杯戦争

兵隊

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
第二次川神聖杯戦争

【Ｎコード】
Ｎ５０５６Ｚ

【作者名】
兵隊

【あらすじ】
聖杯戦争――――。
奇跡ともいえる儀式がまたも開幕する。
奇跡の願望機をめぐり再度開幕した戦争はどういった結末を迎えるのか。

※聖杯戦争の真似事です
※以前募集を募らせていただきましたコラボでございます。
参加表明してくださった作者様に多大な感謝をしつつ書いていき

ますのでよろしくお願いします。

参加者
サザンクロス様
ｙｏｕｋｅｙ様
ナマクラ様
忍様
風様
モーディス様
じょんぺい様

プロローグ　～最強とワンコ～

――――人は必ず何かを願う生き物だ――――。

強くなりたい、世界を平和にしたい、己の力を確かめたい、ある者を見返してやりたい、ある者に復讐してやりたい。
結果はどうあれ、願いという家庭は万人共通である。

己の力ではどうしようもないことを、人は願いと言う。

人間の欲望には際限がない。
願いを叶えれば、また新たな願いを見つけて、それを叶えるために人間はもがく。

だがもし、もがくことなく願いを叶えれるモノがあるとすれば？
もし、何の苦労をすることなく己の欲望を満たすモノがあるとすれば？
人間はどうするであろうか。

答えは簡単なことだ。
それを求めて、足掻き始める。

だからこそ、【それ】を求めて人は争う。
万物の願いを叶える“万能の杯”それこそが――――聖杯。

そして、その聖杯を求めて血で血を洗う闘争。
それこそが――――聖杯戦争。

だが言ってしまえば、聖杯と聖杯戦争のどちらも御伽噺の話だ。
どちらも信憑性はなく、どちらも行われたと言う確たる証拠はない。

そう。
どちらも、今では都市伝説程度のものでしか人々には知られていない――――。

川神院　川神総代執務室　ＡＭ７：３５

「聖杯戦争？」

川神百代が口を開いた。
その場所には百代だけではなく、彼女の祖父である川神鉄心の姿もある。
二人は執務室にあるソファーに、机を挟んで対面するかのように腰掛けている。

百代は先ほどまで、聖杯戦争の実態を説明されていた。
かつてこの川神市で行われた聖杯戦争。
聖杯を手にする権限を持つ人間を聖杯自ら８人の人間を選抜する。
選抜された８人の人間は、サーヴァントと呼ばれる使い魔を召喚

し、覇を競い合い最後まで勝ち残った者が聖杯を手にする権利をえる。

色々と端折りはしたが、百代の受けた説明はそのような内容であった。

「お前の右手に模様は“令呪”と言われておる。サーヴァントを召喚する権利を得るマスターの証であり、絶対命令権じゃ」

「絶対命令権？」

「サーヴァントも意思があるからのう。令呪がある限り、その意思を捻じ曲げて言いつけを守らせることが出来るのじゃ。ちなみに数は三回じゃ」

百代は自分の右手の甲に視線を落とした。

確かにそこには３つの模様が連なって出来ている紋様が刻まれている。

訳が分からなかった。

百代は右手に刻まれていた痣を見つけたので、鉄心に相談した。

彼女には瞬間回復という能力がある。

自身の気を使い、細胞を活性化させてどんな傷でも治癒することが出来る百代だけが扱える能力である。

そんな能力があるにもかかわらず、この痣だけは治癒できなかった。

だからこそ、鉄心に相談したのだが、聞きなれない言葉を鉄心から説明される。

――――聖杯戦争――――。

8人のマスターと8騎のサーヴァントによる殺し合い。

聖杯を巡る血で血を洗うかのような闘争。

いくら川神百代といえど、そんなものは信じられなかった。

「ジジィ、そんな御伽噺みたいなことが本当にあるのか？　そもそもサーヴァントとはなんだ？」

「さっきも行ったが、サーヴァントとは使い魔じゃ。ワシも詳しくは知らんが、異世界の人間を使い魔として現界させマスターが使役する」

「おいおい、本気で言ってるのか？　いくらなんでもファンタジー過ぎるだろ……」

「現に聖杯戦争は存在する。川神院は聖杯戦争を監督してきたからのう」

川神院次期総代である自分が知らなかった真実に驚きを隠せない。今だかつて、そんなこと聞かされていなかったのだ。

「おい、初耳だぞ」

「当たり前じゃ。言っていなかったからのう」

鉄心は暢気に笑いながら言うと、すぐに思案するかのような重苦しい顔つきに変化する。

「とはいっても、その監督を務める川神院からマスターが現れるなんて初めての出来事じゃ」

監督とはつまり裏方のようなものだ。

聖杯戦争による被害を最小限に抑え、マスターと言う存在を隠蔽し、参加者達に聖杯戦争が明るみに出ないように噂守させる。

監督役がいるからこそ、百代は現在まで聖杯戦争というものが存在する事自体しらなかったのだ。

その監督役からマスターが選抜された。
言ってしまえばこれはイレギュラー。ありえないものである。

「それで、私は参加していいんだな？」

「別に良いぞぃ。楽しむんじゃな、何せ５０年に一度あるかないかじゃからの」

「……ジジィも見たことがなかったのか？」

百代の問いに、鉄心はホッホッホと笑うばかり。
多くを語らないところを見ると、恐らくミステリアスな老人はハイカラだと思っているのだろう、と百代は分析する。

とにかく思考を切り替える
目の前の肉親がどんな思考をしているのかも気になるが、今はそれよりも川神聖杯戦争なるもののほうが気になるところであるからだ。

異世界から招かれし８騎のサーヴァント。
剣の使い魔、セイバー。
槍の使い魔、ランサー。
弓の使い魔、アーチャー。

騎乗兵の使い魔、ライダー。
魔術師の使い魔、キャスター。
暗殺者の使い魔、アサシン。
狂戦士の使い魔、バーサーカー。
そして復讐者の使い魔、アヴェンジャー。

これらのクラスを器とし現界されるのがサーヴァント。

異世界から招かれし者。
人類を超越した力を誇りし者たち。

これを聞いて、興奮しない百代ではない。
強い者が招かれる５０年に一度あるかないかの宴だ。

どんな者たちが現れ、どんな武を使うのか。
それが気になって仕方がない。

極論から言ってしまえば、マスターとして戦わなくても百代は別に良いのだ。
だが、マスターとして選ばれたから仕方なくマスターとして戦ってやる。

それが百代の心境である。

「それで聖杯戦争とやらはいつから始まるんだ？」

「明日の０：００からじゃ」

「……随分と急じゃないか？」

思わず呆れてしまう。

まるで、急にやりたくなったからやる。といったニュアンスに聞こえてしまう。

鉄心の説明を聞くと、突発的にやることなど不可能なのはわかるのだが。

「まぁいい。とりあえず学校に行ってくる」

「一つ言い忘れておった。聖杯戦争が始まっても学校には行ってもらうからの？」

「え、戦争なのに学校へ行かなければならないのか？」

「戦争でも学校には行かなくてはいかん」

「……それじゃ行ってくる」

意気消沈。

目にも見えていたやる気が消え失せ、百代は出て行った。

あの様子からすると、学校をサボってまで戦う気だったのだろうがそうはいかない。

学生の本分は勉強である。決して戦うことではないのだ。

百代が出て行ったあと、鉄心は川神聖杯戦争に思いを馳せていた。

数えてこれで二回目。

前回はいつにあったのか、文献にすらなかった伝説の儀式。

まさか自分の代で聖杯戦争を見ることができるとは思いもしなかったからだ。

百代が相談にこなければ、開幕していることすら気付かなかったかもしれない。

それを考えると、百代に感謝せねばならないだろう。

何はともあれ、監督役として責務を全うしなければならない。

決意と同時に疑問が浮かぶ。

聖杯戦争にかかせない代物。

聖杯は開催前日に現れるらしいのだが、それがまったく現れる気配がないのだ。

聖杯がどんな代物なのか、どういった形なのか。
誰も知らないのに、それを奪い合うために聖杯戦争は開始される。

そこで一つの仮説が生まれる。
――――この聖杯戦争、もしかしたら“聖杯”という代物は存在せず開催されるのかもしれない――――。

――――いや、これは考えすぎじゃな。

と、そこへ扉の向こうから一人の気配が。

「ジーちゃーん……」

確認するまでもない。
もう一人の最愛の孫――――川神一子だった。

「どうしたのじゃ、カズ――――」

扉を開けて入ってくる一子に視線を向けて、ある物を見た瞬間、
鉄心は声を失った。

声が出ないほどの驚愕。
それは百代と同じく、手の甲に刻まれた模様。
令呪の存在があった――――――。

プロローグ　～最強とワンコ～（後書き）

みなさんおはこんばんちは、兵隊です！

遂に始まりました、第二次川神聖杯戦争。

とはいっても、本格的指導するのはもう少し先になります。

完結までみなさんよろしくお願いします！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5056z/

第二次川神聖杯戦争

2011年12月17日01時46分発行